

使徒の働き 4 章 23-31 節における 詩篇 2 篇 1-2 節の引用

山崎ランサム和彦

はじめに

詩篇 2 篇は新約聖書において最も頻繁に引用されている旧約聖句の一つである。この詩篇はふつう、高擧されたキリストを宣教するというコンテキストにおいて引用される。従って、この詩篇は「メシア詩篇の精華」¹とすることができる。しかし、詩篇 2 篇 7 節が新約聖書においてしばしば引用されるのに対して、同 1-2 節が明確に引用されるのは、迫害を受けたクリスチャンたちの祈りの中、すなわち使徒 4:25-26 においてのみである。

ルカはどのような目的で詩篇 2:1-2 を引用したのだろうか。この論考において主張されるのは次のことである。すなわち、使徒 4 章の信者の祈りにおける詩篇 2 篇の引用は、ルカのナラティブにおいてキリスト論的および教会論的重要性を持っている。ルカによる詩篇の解釈においては、救済史の概念、すなわち唯一永遠の神が主権的に人間の歴史を導かれるという考えが根本的に重要なのである。

¹ Peter C. Craigie, *Psalms 1-50* (Waco, Tex.: Word, 1983), p. 68.

I. オリジナルのコンテキストにおける詩篇 2 篇 1-2 節

A. 旧約のコンテキストにおける詩篇 2 篇 1-2 節

1. 歴史的コンテキスト

詩篇 2 篇は王の詩篇に分類され、王の即位に関する詩であると思われる²。シオンへの言及 (6 節) から、この詩篇の歴史的背景はユダ王国にあることが推測できる³。また、II サムエル 7:14 との並行関係から、この詩篇が言及しているのはダビデ系の王であることが示唆される⁴。この詩篇はおそらく捕囚前のユダ王国で書かれたのであろう⁵。

2. 詩篇の構造とメッセージ

大多数の学者は、この詩篇が 4 つの連から構成されていると考えている。古代の中東において、偉大な王の死と、それに続く新しい王の即位は、しばしば属国の王たちの反乱を引き起こした⁶。彼らはお互いに謀議を巡らして、ダビデ系の王の支配から逃れようとする (1-3 節)。しかしヤハウエは嘲りをもって彼らの空しい試みに応え、神ご自身が新しい王をエルサレムに立てたことを宣言する (4-6 節)。ヤハウエの「子」であるダビデ系の王もまた、このようにして認められた神との関係に基づいて世界の支配権を宣言する

² Hans-Joachim Kraus, *Psalms 1-59: A Commentary* (Minneapolis: Augsburg, 1988), p. 126; Hermann Gunkel, *Introduction to Psalms: The Genres of the Religious Lyric of Israel* (Macon, Ga.: Mercer University Press, 1998), p. 102; Craigie, *Psalms 1-50*, p. 64.

³ Gunkel, *Introduction*, p. 119; Artur Weiser, *The Psalms: A Commentary* (Philadelphia: Westminster, 1962), p. 109; Kraus, *Psalms 1-59*, p. 126; cf. Craigie, *Psalms 1-50*, p. 64.

⁴ Wim J. C. Weren, "Psalm 2 in Luke-Acts: An Intertextual Study," in *Intertextuality in Biblical Writings: Essays in Honour of Bas van Ierser* (Kampen, Netherlands: J. H. Kok, 1989), p. 195. Cf. Craigie, *Psalms 1-50*, p. 64.

⁵ 詩篇 2 篇の執筆時期に関する種々の見解とその評価については、David Wallace, *Texts in Tandem: The Coalescent Usage of Psalm 2 and Psalm 110 in Early Christianity* (Ph. D. diss., Baylor University, 1995), pp. 85-96 を見よ。

⁶ Kraus, *Psalms 1-59*, p. 126 を参照。

(7-9 節)。最後に詩人は地上の王たちに対して、ヤハウェとその王に服従するよう呼びかける。反逆は神の怒りと裁きを呼び起こすが、服従は祝福をもたらすのである (10-12 節)。詩人は地上の王たち (3 節)、ヤハウェ (6 節)、ダビデ系の王 (7-9 節) といった複数の語り手によるポリフォニックな手法を用いて、劇的効果を高めている。以上をまとめると、この詩は次のようなキアスムス的構造を持っていると考えられる。

A 地上の国々の反乱 (1-3 節)

B 天における神の支配 (4-6 節)

B' 地における王の支配 (7-9 節)

A' 地上の国々への宣告 (10-12 節)

この詩篇の中心的メッセージは、ダビデ系の王の権威はヤハウェの全世界の主権に基づいているということである⁷。このメッセージの核心にあるのは、王がヤハウェの「子」である (7 節) と言う概念である⁸。異邦人の国々の反逆がむなしなのは、地上のダビデ王国の背後にはヤハウェの世界的支配が存在するからなのである。

この詩篇に登場するヤハウェに油注がれた王 (2 節) は、元来の歴史的コンテクストにおいてはあくまでも人間の王であり、超人的なメシアとして描かれているわけではない。しかし、ダビデ契約の永遠性 (II サムエル 7:16 参照) とヤハウェの支配の宇宙的広がり (詩篇 2:8-9) は、この王の中に

単なる人間を超えた存在を見出す余地を残していると言える⁹。

B. 後のユダヤ教における詩篇 2:1-2

1. 詩篇全体における第 2 篇の位置づけ

詩篇 2 篇は 1 篇と共に詩篇全巻の冒頭に置かれており、全体への序論的役割を果たしている¹⁰。この二つの詩篇がもともと一つの詩であったかどうかはともかく、詩篇の編者が 1 篇と 2 篇の間にある並行関係を意識していたことは明らかである。1 篇では読者は知恵を持って個人レベルでの善悪の選択をするよう求められ、2 篇では同様の主題が国家のレベルで取り扱われている。したがって、詩篇全体のコンテクストの中では、2 篇はオリジナルの歴史的コンテクストよりもさらに普遍的な枠組みの中でとらえ直されていることが分かる¹¹。したがって、詩篇 2 篇は詩篇全体の冒頭に置かれることによって、そこに潜在的に含まれていた普遍的・終末論的メッセージがより明確にされ、後の様々なメシア的解釈への道を開いたと考えることができる。

2. 詩篇 2 篇のギリシア語訳

詩篇 2 篇の七十人訳はマソラ本文といくつかの点で異なっているが、最も

⁹ Weiser (*Psalms*, 11)によれば、神中心の視点から歴史的出来事にアプローチすることによって、詩人は王の即位の内に「救済史に属する新しい意味」を見出すことができた。

¹⁰ 時として、詩篇の最初の 2 篇が元来は一つの詩として書かれたと主張されることがある。使徒 13:33 の西方テキストは詩篇 2:7 を「最初の (τὸ πρῶτον) 詩篇」からのものとして引用している。1:1 と 2:12 に現れる ἡσυχία (「幸いなことよ」) も、1 篇と 2 篇に統一感を与えるインクルーシオと見なされることがある。しかし、Samuel Terrien (*The Psalms: Strophic Structure and Theological Commentary* [Grand Rapids: Eerdmans, 2003], p. 80)は、この二つの詩篇の間には、語彙、イメージ、構造において大きな違いがあることを指摘している。

¹¹ 詩篇全体のコンテクストの中では、2 篇の意義は歴史的なダビデ王家を超えて終末論的な *David redivivus* を指し示すものとなっている。Alfons Deissler, “Die Stellung von Psalm 2 im Psalter. Folgen für die Auslegung,” in *Beiträge zur Psalmenforschung: Psalmen 2 und 22* (Würzburg: Echter, 1988), p. 83; cf. Watts, “Psalm 2,” p. 80.

⁷ James W. Watts (“Psalm 2 in the Context of Biblical Theology,” *HBT* 12 [June 1990], p. 79)は、「詩篇 2 篇においては、神の国とエルサレムの王の国は同一視されている」と述べている。

⁸ 王が「神の子」であるという概念自体は古代中東世界において珍しいものではなかった。しかし、例えばエジプトの王のように神々から物理的に生み出されたという神話的考えとは異なり、ユダの王の神の子としての身分は、ダビデの王家に対する神の「わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる」(2 サムエル 7:14) という契約に基づいた養子としての身分である。

重要な違いは、6 節でギリシア語テキストは受動態の $\kappa\alpha\tau\epsilon\sigma\tau\eta\theta\eta\nu$ (「立てられた」) を用いている点で、ここでは語り手は神 (マソラ本文) ではなく王であることになる¹²。さらに 12 節では七十人訳では $\delta\rho\upsilon\lambda\alpha\sigma\theta\epsilon\ \pi\alpha\iota\delta\epsilon\ \alpha\varsigma$ (「教えを受けよ」) となっており、マソラ本文の נשקו־בְּר (「御子に口づけせよ」) と異なっている。「御子」への言及がないため、6-12 節のすべてを王の言葉として解釈することが可能となる。これらすべての違いにかかわらず、神とその王の世界的支配や異邦人の国々の反逆のむなしさといった、全体的なメッセージはマソラ本文と同じであり、明確にメシア的な理解を示してはいない。

3. 中間時代における詩篇 2 篇

中間時代において詩篇 2:1-2 が明確に言及されているのは、ソロモンの詩篇とクムランの「詩華集」においてである。

ソロモンの詩篇はおそらく紀元前 1 世紀に書かれた¹³。17 章で作者は神が「ダビデの子」を力づけてくださるよう祈る (21 節)¹⁴。その手段はエルサレムから異邦人を追放し、罪人の高慢を「陶器のように ($\sigma\kappa\epsilon\ \kappa\epsilon\rho\alpha\mu\omega\varsigma$)」破壊し (23 節)、彼らの自信を「鉄の杖をもって ($\beta\acute{\omega}\ \sigma\iota\delta\eta\rho\omega\varsigma$)」打ち砕くことである (24 節) が、これは明らかに詩篇 2:9 への言及である。さらに、国々が彼の栄光を見るために地の果てからやってくる (31 節; 詩篇 2:8 参照)。この王は「主であるメシア ($\chi\rho\iota\sigma\tau\acute{\omicron}\varsigma\ \kappa\alpha\tau\alpha\ \rho\iota\omicron\varsigma$)」と呼ばれる (32 節)¹⁵。ソロモン詩篇 17 章においては、詩篇 2 篇

はイスラエルを政治的に確立する、ダビデ系のメシアを描くために用いられているのである。

クムラン第 4 洞窟から発見された「詩華集 (4QFlor)」は II サムエル 7 章や詩篇 1-2 篇といったテキストのミドラシュである。この断片はおそらく紀元前 1 世紀末から後 1 世紀の間に書かれたと思われるが、正確な年代は分かっていない¹⁶。この文書には詩篇 2:1-2 の引用に続いて、その「注釈 (ペシエル)」が記されている (1:18-19)¹⁷。ここでは詩篇 2:1-2 は未来の異邦人諸国との終末論的戦いを指すものとして解釈されている。国々は「イスラエルの選ばれた者たち ($\text{בְּחִירֵי יִשְׂרָאֵל}$)」すなわちクムラン共同体に対抗する¹⁸。「詩華集」では祭司的メシアと並んでダビデ系のメシアが言及されているが (1:11-13)、終末論的戦いの記述ではこのメシアについては一言も触れられていない。しかし、「詩華集」全体における、戦士としてのメシア像から考えると、このメシアが終末の戦いに参加していることは十分考えられる¹⁹。

となっているが、ギリシア語とシリア語の全写本では $\chi\rho\iota\sigma\tau\acute{\omicron}\varsigma\ \kappa\alpha\tau\alpha\ \rho\iota\omicron\varsigma$ となっており、Wright (OTP p. 2:668 n. z) は「『主のメシア』という読みには写本上の根拠は全くない」と述べている。

¹⁶ Geza Vermès, *The Complete Dead Sea Scrolls in English* [New York: Penguin, 1997], p. 493; George J. Brooke, *Exegesis at Qumran: 4QFlorilegium in Its Jewish Context* (Sheffield: JSOT, 1985), p. 217 を見よ。

¹⁷ この箇所のヘブル語原文および英訳については、Florentino García Martínez and Eibert J. C. Tigchelaar, eds., *The Dead Sea Scrolls Study Edition* (2 vols.; Leiden: Brill, 1997-1998), pp. 1:354-55 を見よ。

¹⁸ C. K. Barrett, *The Acts of the Apostles* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1994), p. 1:245 も参照。

¹⁹ 写本の最初の段に含まれるテキストが 1:19 の後で欠落しているため、このメシアが失われたテキストの中で言及されている可能性もあるが、推測の域を出ない。Paul Maiberger, “Das Verständnis von Psalm 2 in der Septuaginta, im Targum, in Qumran, im frühen Judentum und im Neuen Testament,” in *Beiträge zur Psalmenforschung: Psalmen 2 und 22* (Würzburg: Echter, 1988), p. 100 を見よ。「詩華集」におけるダビデ系メシアの軍事的役割については、Kenneth R. Atkinson, “On the Use of Scripture in the Development of Militant Davidic Messianism at Qumran: New Light from Psalm of Solomon 17,” in *The Interpretation of Scripture in Early Judaism and Christianity: Studies in Language and Tradition* (Sheffield: Sheffield

¹² この変化に伴い、マソラ本文の 1 人称の表現 $\text{מִלְכִּי וְיְהוָה־קִדְשִׁי}$ がそれぞれ $\beta\alpha\sigma\iota\lambda\epsilon\ \alpha\pi\prime\ \alpha\tau\omicron$ と $\rho\omicron\varsigma\ \tau\omicron\ \alpha\gamma\iota\omicron\nu\ \alpha\tau\omicron$ に変えられている。

¹³ R. B. Wright (OTP p. 2:641) はこの文書の成立年代を広く見積もって紀元前 125 年から紀元 1 世紀の初頭、狭く見積もって紀元前 75 年から 45 年の間としている。

¹⁴ 4 節には、II サムエル 7 章への言及が見られる。

¹⁵ この人物をメシアとして解釈すべきかどうかは議論が分かれている。Rahlfs 版七十人訳では 32 節は $\chi\rho\iota\sigma\tau\acute{\omicron}\varsigma\ \kappa\upsilon\rho\iota\omicron\upsilon$ (主のキリスト/主によって油注がれた者)

このように、ユダヤ人のある者は詩篇 2 篇を様々な方法で終末論的に解釈するようになっていったが、新約時代以前に書かれた、この詩篇の唯一の明確にメシア的な解釈はソロモン詩篇 17 章のものである²⁰。

II. 使徒 4 章 23-31 節における詩篇 2 篇 1-2 節

A. 使徒 4 章 23-31 節積義

詩篇 2 篇は新約聖書の中で最も頻繁に引用される旧約聖書の箇所であるが、2:1-2 が直接引用されるのは使徒 4:23-31、すなわち初代のエルサレム教会がユダヤ人指導者から最初の迫害を受けた時の祈りにおいてのみである²¹。

1. 文学的コンテクスト

Academic Press, 2000), p. 115 を見よ。

²⁰ Joseph A. Fitzmyer (*The Acts of the Apostles* [New York: Doubleday, 1998], p. 309) はキリスト教以前には詩篇 2 篇のメシア的解釈は存在しなかったと論じている。これに対して F. F. Bruce (*The Acts of the Apostles: The Greek Texts with Introduction and Commentary* [3d rev. and enlarged ed.; Grand Rapids: Eerdmans, 1990], p. 157) は、ソロモン詩篇 17 章を詩篇 2 篇の最初のメシア的解釈と見なしている。詩篇 2 篇のベシエルの年代を特定することが困難なことから、そこにおける明確なメシアへの言及がないことから、クムラン「詩華集」がキリスト教以前のメシア的解釈を示すもう一つの例であるかどうかは断定することはできない。

²¹ Ernst Haenchen, *The Acts of the Apostles: A Commentary* (Philadelphia: Westminster, 1971), p. 228; Fitzmyer, *Acts*, p. 307; Gerd Lüdemann, *Early Christianity according to the Traditions in Acts: A Commentary* (Minneapolis: Fortress, 1984), p. 59; 荒井献『使徒行伝 上巻』(新教出版社、1977年) 296-303頁などは、この箇所がルカによる創作であると主張する。しかし、I・ハワード・マーシャル(『使徒の働き』[いのちのことば社、2005年] 122頁)は、この箇所がルカのナラティヴ全体(例えば彼のヘロデとピラトに対する態度)とのきわめて緩やかな関係しか持っていないことを理由に、この説を否定している。同様に、Darrell L. Bock (*Proclamation from Prophecy and Pattern: Lucan Old Testament Christology* [Sheffield: JSOT, 1987], pp. 203-205)も、ルカが伝統的資料を用いたと論じている。この箇所をルカの創作とは見なさない方が妥当であるが、このことはこの箇所とルカ自身の神学との間に齟齬があることを必ずしも意味しない。

使徒 4:23-31 は、3:1 から始まるセクションのクライマックスである。ペンテコステの日の出来事からほどなく、ペテロとヨハネは美しの門の所にいた足のきかない男をいやした(3:1-10)。このいやしがきっかけとなり、ペテロはソロモンの回廊で説教をすることになる。彼はユダヤ人たちにイエスの復活について宣べ伝え、悔い改めを迫った(3:11-26)。しかしこれは神殿の指導者たちによる迫害を引き起こすことになり、ペテロとヨハネはサンヘドリンの前でキリストを証した。ついに神殿の指導者たちは、イエスの名によって説教してはならないと脅した上で、二人を釈放した(4:1-22)。ペテロとヨハネが仲間の所に戻り、ユダヤ人指導者たちの脅迫について報告すると、信者たちは詩篇 2:1-2 の引用を含む祈りによって応答した(4:23-31)。

2. 当該箇所の概観

使徒 4:23-31 は次のような構造を持っていると考えられる。

- I. 祈りへの導入 (23-24a)
- II. 信者たちの祈り (24b-30)
 - (A) 神への呼びかけ (24b)
 - (B) 詩篇 2:1-2 の引用 (25-26)
 - (C) 詩篇の解釈 (27-28)
 - (D) 嘆願 (29-30)
- III. 祈りの結果 (31)

使徒 4 章のこの祈りは、七十人訳のイザヤ 37:16-20 と II 列王記 19:15-19 におけるヘゼキヤの祈りとの類似性がしばしば指摘されている²²。この祈りは神に対する呼びかけで始まる。ギリシア語 $\delta\sigma\tau\omicron\tau\alpha$ (「主」) は神の「し

²² どちらの祈りも、創造者としての神に対する呼びかけで始まり、現在における敵の脅かしに神の注意を促し、嘆願を持って終わっている。Haenchen, *Acts*, p. 226 を見よ。